埋蔵文化財公開活用事業

霊仙山

―「江陽四高山ノ其ノ一ツナリ」―

米原市教育委員会

2017.3

霊仙山（撮影：中村幸雄）

霊　仙　山

ー「江陽四高山ノ其ノ一ツナリ」ー

※『淡海木間攫』の記述（P12参照）

目　次

プロローグ　霊仙山の呼び名……1

Ⅰ　霊仙山の自然が生んだ「山の霊力」……2

ⅰ霊仙山の美観と眺望……2

ⅱ霊仙山の地形と行場……3

ⅲ山麓の湧き水……4

Ⅱ　霊仙山周辺の遺跡……5

ⅰ縄文時代の山麓……5

ⅱ古墳時代の山麓……7

ⅲ古代寺院と駅家……8

ⅳ戦国の巷・霊仙山麓の城……9

Ⅲ　霊仙山の山岳信仰……12

ⅰ霊仙山を描いた絵図……12

ⅱ霊山寺のまぼろし……13

ⅲ山麓の山寺遺跡と廃村……14

ⅳ霊仙山の修験道と修行者列伝……17

ⅴ霊仙山由来の仏像……18

Ⅳ　普門山松尾寺の信仰と仏教美術……19

ⅰ松尾寺の歴史……19

ⅱ本尊と参詣者……20

ⅲ松尾寺の文化財……22

Ⅴ　霊仙山と生きる……23

ⅰ霊仙山をとりまく雨乞い行事……23

ⅱ霊仙山と人々のくらし……25

Ⅵ　霊仙山を取りまく宿場町……26

霊仙山の位置

米原市歴史キャラ
「山伏くん」

「りやうせん山村々掟之事」
（江龍家文書）
慶長18年（1613）

プロローグ　霊仙山の呼び名

「霊仙山」は、もとは霊山と書き「りょうぜん」と読みました。「霊山」の名称は、釈迦（しゃか）が説教をした仏教の聖地・霊鷲山（りょうじゅせん）にちなみ、全国にたくさんあります。江戸時代の国絵図や地誌ももっぱら「霊山」を用いています。天正16年（1588）の神明（しんめい）神社文書に「りやうせん山」の文字があり、西坂の柴田家所蔵の嘉永（かえい）２年（1849）の絵図に「霊仙山」「霊遷山」の文字がありますが、地元の呼び名にもとづく当て字だと思われます。「霊仙」の字は、地図では明治24年「近江国新町村全図」。地誌類では明治16年版「滋賀県統計書」からです。一説に、明治７年に犬上郡落合、今畑（いまはた）、入谷（にゅうだに）三村が合併したとき、祭神「霊山さん」に遠慮して「霊仙村」としたことや、明治25年に参謀本部陸地測量部の調査で、榑ヶ畑（くれがはた）村民が「霊山やま」と呼んでいたので、公的な地形図に「霊仙山」と記載されたとされます。いずれにしても「霊山」とは、山の超自然的な威力（霊力）を表す名前です。

Ⅰ．霊仙山の自然が生んだ「山の霊力」

ⅰ　霊仙山の美観と眺望

霊仙山は、鈴鹿山脈の最北に位置し、米原市と犬上郡多賀町にまたがります。集落に比較的近く、湖北・湖東の平野部から、その重厚な山容を眺めることができます。

山上部はなだらかで、三角点（中霊仙）1084㍍、最高点（南霊仙）1093㍍、経塚山（北霊仙）1040㍍のピークがあります。石灰岩からなるカルスト地形で、水持ちが悪く山頂部では高い樹木が生育できないため、360度良好な展望がひらけ、北に対峙する伊吹山。琵琶湖をとりまく近江平野。御嶽山や加賀白山、穂高連峰、乗鞍までが一望できます。

霊仙山から伊吹山と加賀白山を望む

湖北平野部を望む

濃尾平野越しに御嶽山を望む

穂高連峰と乗鞍を望む

◇コラム　霊仙山のフクジュソウ（福寿草）

キンポウゲ科の多年草で、アジア北部に分布し、日本では山地に自生しています。縁起のよい名前と、早春、葉に先立って黄色の美しい花が開き珍重されました。古来、正月の祝いものとして鉢植えにしたのは黄色重弁のものですが、霊仙山に自生するフクジュソウは、単弁黄色で、弁の数は13前後です。榑ヶ畑では、御所よりフクジュソウの御用を仰せつけられ、榑ヶ畑へフクジュソウ採取に来た御所の庭師の名を記した絵符や、榑ヶ畑の庄屋がフクジュソウを御所に献上に行く際に用いた「御所提灯」がのこっているそうです。

※このページの写真は中村幸雄撮影

ii　霊仙山の地形と行場

石灰岩で覆われた霊仙山には、特徴的な地形がみられます。山頂にはドリーネ（窪地）があり、水が溜まって「お池」「お虎ヶ池」「尼ヶ池」「本池」「仁平池」「蛇池」などの池となり、竜神信仰や雨乞い行事と深くかかわっています。ただし、これらの池の名称や位置は、現在明確ではありません。カレンフェルトとよばれる石灰岩が林立する経塚山。山中には、漆ヶ滝やお池白水瀧。米原市河内や多賀町河内の風穴、継子穴、谷山谷のコウモリ穴などの洞窟は、霊仙山の胎内から生まれ替わる擬死再生の装置です。神仏が降臨する切り立った断崖が、谷山谷の屏風岩や権現谷にみられます。さらに、山麓には七湧水を代表する清水があり、これは山頂に降った雨が霊仙山という神仏の体内を通って湧き出たものといえます。山頂部の池、山中の瀧、断崖、洞窟。いずれも修験道の行者の修行場所（行場）に適した地形です。また、水は超能力につながり、山麓の湧水も修験道には欠かせないものです。このように霊仙山の自然環境は、修験道の適地として仏教の聖地となり、「霊山」の名にふさわしいものでした。丹生谷の奥の滝（漆ヶ滝）には「往古、丹生之大武坊という人、住し所」（『淡海古説』）とあり、大武坊は霊仙山の行者のひとりでしょう。霊仙山の特徴的な地形は、山伏たちの格好の行場だったのです。

お池（撮影：中村幸雄）

継子穴（幾利穴）

経塚山（撮影：中村幸雄）

◇コラム　滝と洞窟の伝説

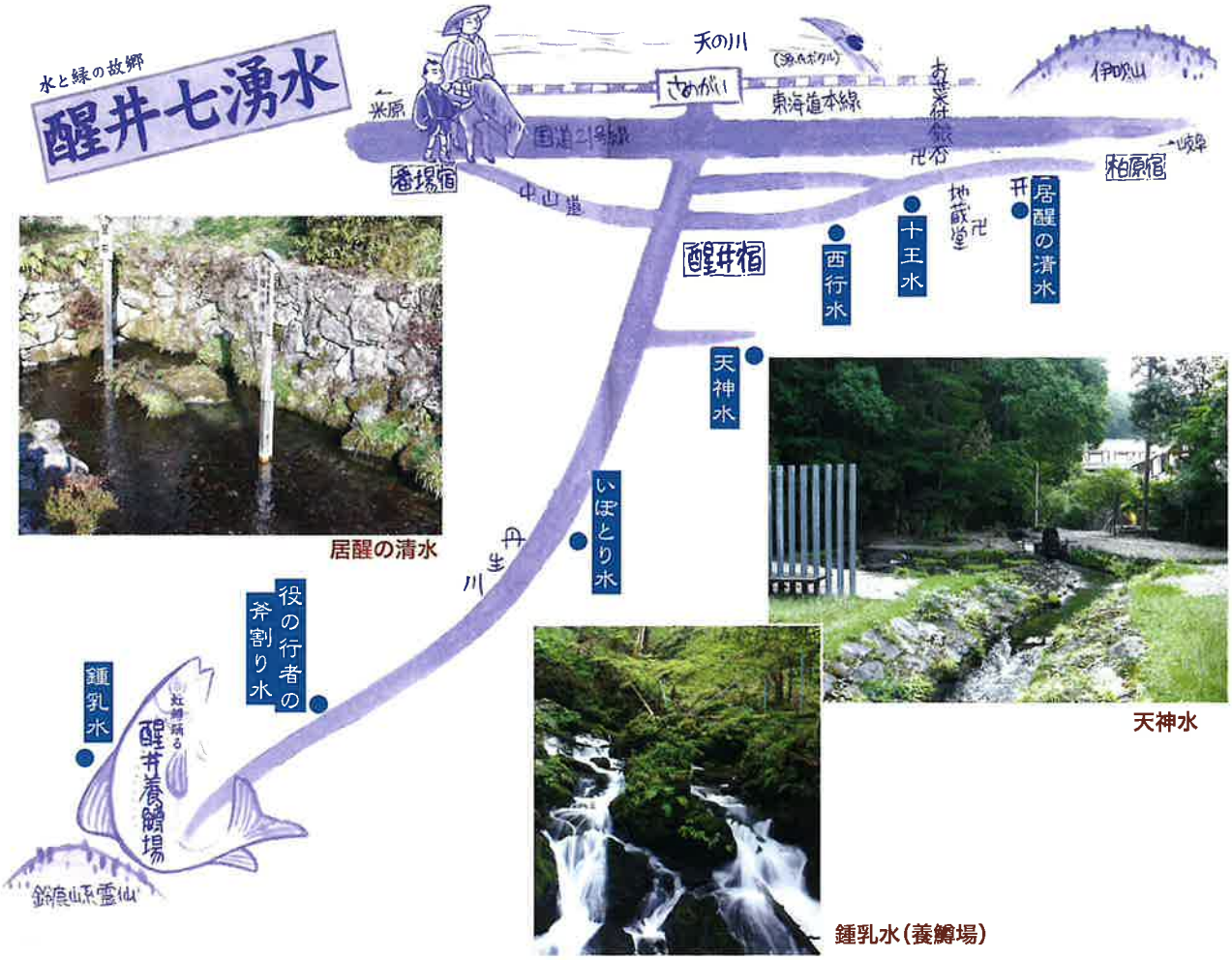
お池白水瀧　谷山谷の入り口あたりにあり、雌雄２条に分れていましたが、昭和47年のダム工事で消滅しました。霊仙山にはお虎という山姥（深山に住む女の怪物）が住んでいて、伊吹山の大盗賊・伊吹弥三郎と夫婦で、弥三郎が遊びに来るときに、山頂中央の池で米をといだときの白水が、滝になったことからこの名があるといわれています。

継子穴　柏原から登っていくと、七合目と八合目の間ぐらいに「継子穴」（幾利穴）とよばれる縦穴が口を開けています。穴は70数㍍下ったところで、狭い横穴になるそうです。その昔、信心深い男のもとへ後妻に入った女性が、前妻の子どもを山中に連れ出して、この穴に突き落として帰りました。家に帰ると驚いたことに子どもが先に帰っています。「お坊さんが穴から引き上げ、連れて帰ってくれた」とのこと。女性は前非を悔い、以後、仏を信じるようになりました。ここにも、名のない霊仙山の行者の姿があります。

屏風岩

漆ヶ滝（撮影：中村幸雄）

iii　山麓の湧き水



◇コラム　湧水と高僧伝説

西行水は「仲算結縁の水」とよばれます。仲算は平安時代中期の法相宗の僧で、応和３年（963）の法華経講論では南都仏教（興福寺）側の代表として北嶺（延暦寺）天台宗の代表を屈服させるほど論争にすぐれた高僧です。延喜年間（901～922）、東国への旅の途中で醒井を通り、ふところの短剣で岩の端を切ると清水がたちまちほとばしったということです。

十王水は「浄蔵結縁水」です。浄蔵は平安時代中期の天台宗の僧。平将門が関東で乱をおこすと、その調伏のための修法をおこない霊験がありました。やはり岩をくぼめて水源を開きました。いずれも、東山道（中山道）を往く僧が、神仏の山・霊仙山の胎内から湧き出る水を通じて、仏縁を結んだ伝承です。

◇コラム　日本武尊

伊吹山の神との戦いに敗れた日本武尊は、醒井の水でいったん蘇生するものの、伊勢へ向かう途中の能褒野（三重県鈴鹿市付近）で亡くなります。奈良時代以降、伊吹山の神の力を得るために多くの修行者たちが、伊吹山へ入峰しました。

II. 霊仙山周辺の遺跡

i　縄文時代の山麓

平成28年７月、霊仙山登山道の保全確認中、山頂手前の鞍部で、１点の石器が採集され、伊吹山文化資料館に持ち込まれました。縄文時代草創期の小動物を狩るための槍先と考えられる有舌尖頭器で、縄文人が約１万年前に山頂で活動していたことがわかりました。

山麓では、縄文時代中期の竪穴住居跡が近畿地方で初めて見つかった番の面遺跡（梓河内・柏原）が知られています。丹生川沿いの谷筋では、大型蛤刃石斧が採集された江竜遺跡や朝倉遺跡（下丹生）、上丹生では、昭和初期に神明神社付近で完形の磨製石斧が出土しています（上丹生Ａ遺跡）。上丹生集落の奥のイモイ谷でも磨製石斧が工事中に見つかり、枝折でも石斧が見つかるなど、縄文人の痕跡が確認されています。

有舌尖頭器

◇コラム　山頂の尖頭器

かつて一面がササやカヤで覆われていた霊仙山頂は、近年、ニホンジカの食害により、赤茶けた表土が露出し、有舌尖頭器は、その赤土の上で見つかりました。縄文の狩人の落とし物と考えられ、石材は黒色のチャート製で、先端が欠けていますが長さ5.2㌢、最大幅２㌢、厚さ0.7㌢、重さ８㌘を測ります。日本最古級の土偶が見つかった東近江市相谷熊原遺跡も縄文草創期の遺跡です。ここでは、三重県側の遺跡とのつながりや、鈴鹿山地東麓を利用して、美濃の下呂石が石器の材料として入ってきています。このルートに沿う霊仙山で狩りしたのかもしれません。

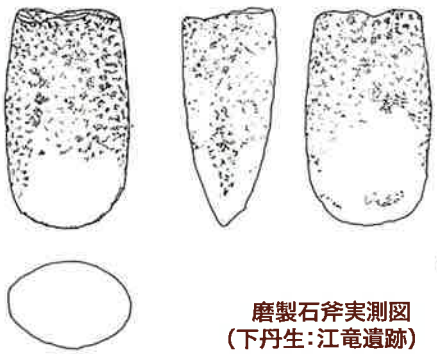
シカの食害で裸地が広がる山頂（撮影：中村幸雄）

丹生谷の遺跡

磨製石斧
（枝折：個人蔵）

磨製石斧
（下丹生イモイ谷：個人蔵）

磨製石斧
（上丹生Ａ遺跡：個人蔵）



磨製石斧実測図
（下丹生：江竜遺跡）

◇コラム　石器を作ったムラ　―番の面遺跡―

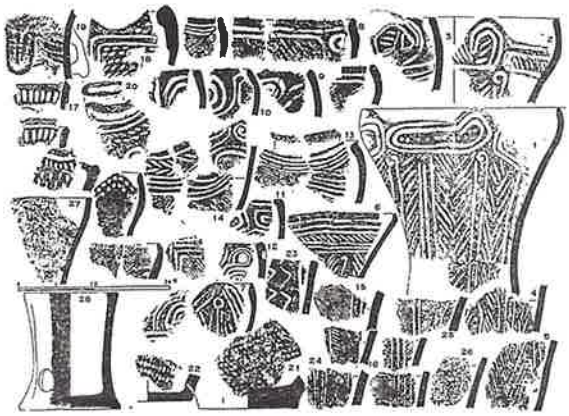
梓河内と柏原の境にあたり、霊仙山と清滝山（きよたきやま）にはさまれた峡谷部の通称番の山の台地上に番の面遺跡（市史跡）があります。昭和29年、畑の開墾で縄文土器の破片30数個が出土し、翌年７月、京都学芸大学により発掘調査がおこなわれ、近畿地方ではじめて縄文時代の竪穴住居跡が見つかりました。住居跡は、長野県や岐阜県のものと構造が似て、土器も東日本的なもので、信濃、飛騨、美濃等との文化的交流をもとに成立していることがわかりました。「東西文化の接点・まいばら」は、縄文時代から始まっていたのです。

河内の個人宅には、約320点の石鏃（せきぞく）が保管されています。青色・黄色・白色、透明・不透明などカラフルなチャート製です。わずかな調査面積にもかかわらず、これだけ多量の石鏃が出土している遺跡は県内にはありません。清滝山は良質のチャートの産地で、番の面の縄文人はこの石材を利用して石鏃を作り、周辺の村々に供給していたのです。

石器・土器（個人蔵）

番の面遺跡の土器（個人蔵）

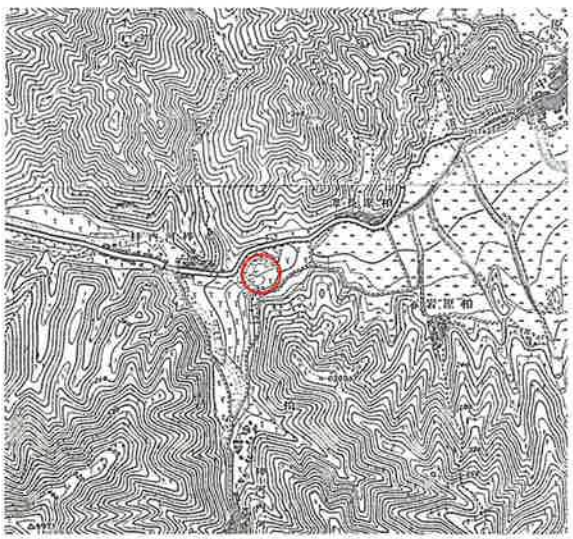
竪穴住居跡



出土土器実測図

番の面遺跡現状

石鏃（個人蔵）



番の面遺跡位置図

塚原古墳群発掘状況

内行花文鏡（石淵山古墳）

下丹生古墳石室

下丹生古墳

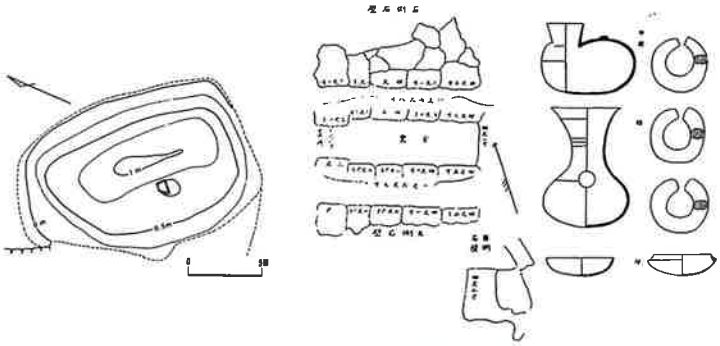
ii　古墳時代の山麓

丹生谷の玄関口枝折には、古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）の群集墳が集中しています。

平野部にある塚原古墳群、これを望む片山古墳群や耳谷古墳です。昭和57年に調査された塚原２号墳では、横穴式石室から、須恵器・土師器・鉄製品・馬具のほか、勾玉・管玉・ガラス小玉・石製玉など、死者への副葬品がたくさん出土しました。片山古墳群は、大正７年に横穴式石室が発見され、遺物には須恵器や耳飾り、鉄製品や馬具がありました。

石淵山古墳群（河南）では、昭和35年に横穴式石室が調査されたほか、明治から昭和初期にかけて石室が発見されて、明治16～17年頃に破壊された1号墳から出土したと伝えられる内行花文鏡（市考古資料）は、直径11.7㌢を測り、大陸から持ち込まれた舶載鏡と考えられています。

下丹生古墳（市史跡／下丹生）は、横穴式石室がほぼ完全にのこり、内部を観察することができる、市内では唯一の古墳です。善仁寺背後の標高約150㍍の丘陵に築かれた円墳で、直径約14.5㍍、高さ約3.5㍍を測ります。下丹生古墳は、古代豪族・息長氏から分かれてこの地に進出した、息長丹生真人一族の墓だと伝えられています。



王塚古墳概略図と出土品（柏原）

◇コラム　柏原地域の古墳

霊仙山麓で丹生谷に並ぶ古墳の密集地が柏原地域です。金比羅神社古墳群・王塚古墳・長塚古墳・王子古墳（柏原）、駒平太古墳（須川）が確認されています。王子古墳（市史跡）は、全長45㍍の前方後円墳とされますが、時期や墳形は明らかではありません。

王塚古墳は、明治40年頃に発掘され、横穴式石室の見取図と出土品目録がのこされています。７世紀初頭頃の須恵器のほか、金環・銀環（耳飾り）、刀子が出土しています。

王子古墳

iii　古代寺院と駅家

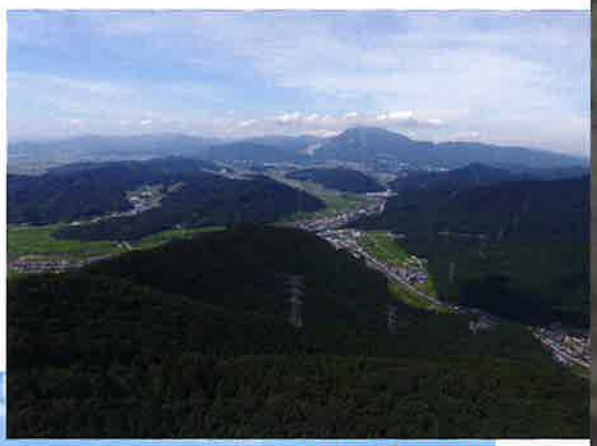
古墳時代の次の時代の地域支配のシンボルは古代寺院です。仏教が伝わり、これを国是と定められると、古代豪族息長氏とその支族の勢力範囲である天野川流域に、三大寺（枝折）、法勝寺（高溝）、飯村廃寺（飯）、磯廃寺（磯）、法泉寺（本郷）などの古代寺院が建立されました。

明治36年、醒井小学校の増改築で白鳳時代（７世紀後半）の瓦が多量に出土しました。昭和57年には小字塚原で発掘調査がおこなわれ、７世紀後半から８世紀初頭の寺院の基礎が見つかりました。基壇は東西24×南北21㍍で、これが三大寺の建物跡です。山が迫った地形から、瓦葺建物１棟のみの寺院と推定されます。北側の小学校校地からも瓦が出土しています。息長氏の拠点である近江地域から醒井付近の天野川流域は、壬申の乱の激戦地「息長の横河」と考えられます。天武天皇（大海人皇子）は、壬申の乱ゆかりの地に寺院を建立しています。しかし、三大寺は、わずか20～30年で衰退し、後述する霊山寺につながることはありませんでした。

さらに、この地は古代東山道に30里（約16㌔㍍）ごとに置かれた駅家のひとつ「横川の駅家」の推定地でもあります。古代、醒井地域の重要性がうかがえます。

三大寺跡基壇出土状況（小字塚原）

明治36年出土軒瓦（三大寺跡）

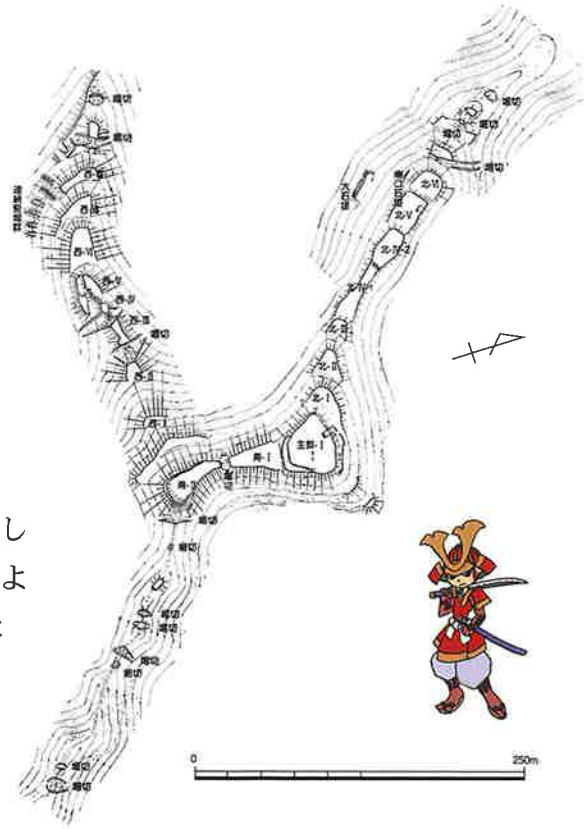


醒井地域（撮影：高木浩二）

天野川流域の古代寺院と霊仙山麓の山城

iv　戦国の巷・霊仙山麓の城

■鎌刃城　―天主の祖形の大櫓―（番場／国史跡）



【歴史】

番場は古くから東山道（中山道）の要衝に位置し、鎌倉時代には土肥氏が箕浦庄の地頭として、番場に居館（殿屋敷）を構えました。戦国時代に領主が堀氏に代わり、文明４年（1472）、鎌刃城は堀氏の城として『今井軍記』にあらわれます。天文７年（1538）、六角定頼が湖北に侵攻し、鎌刃城をはじめ、浅井氏領国南端を守る太尾山城、磯山城、佐和山城などがことごとく落城しました。このとき鎌刃城主堀石見は京極高広方に属していたようで、当時の坂田郡南部（現在の米原市南部）は、六角氏と浅井氏の抗争に加え、湖北の守護京極氏政権も維持されるという、複雑な様相だったようです。

元亀元年（1570）、織田信長が近江に侵攻すると、堀秀村は織田方に内応し、一説に坂田郡で６万石を賜り、鎌刃城は湖北支配の拠点となりました。しかし、天正２（1574）、堀氏は突然改易され廃城となります。

【遺構】

大櫓跡

主郭虎口への石段と石積み

大石垣

標高384mの山頂に築かれた典型的な戦国時代の山城で、主郭と副郭を山頂に配し、主郭より北西に派生する尾根上に７ヶ所の曲輪を連ね、その先端は巨大な三重の堀切によって防御しています。また、副郭の西に派生する尾根上にも７ヶ所の曲輪を連ねます。副郭の南東は城よりも高い所に尾根が続くため８本にのぼる堀切を設けて尾根筋を遮断します。この尾根は鎌の刃状にそそり立ちます。この堀切の南崖下に青竜の滝があり、滝口には城内に水を引き入れた水の手遺構がのこされています。

発掘調査では、戦国時代にいち早く石垣を導入した先駆的な城郭であったことが明らかとなりました。主郭では、礎石建物のほかに、石垣で築かれた枡形虎口と門跡、石段の城道が検出されました。北-Ⅵ郭では、７間×７間以上の半地下式構造の穴蔵をもつ重層建物が検出され、天主の祖形となる大櫓と推定されています。

◇コラム　城を活かしたまちづくり

里山の山城跡は、まちづくりの重要なツールであり、ふるさとへの誇りを育むシンボルです。米原市では城館跡を活かしたまちづくりが盛んで、とくに、鎌刃城からはじまった「中世山城跡琵琶湖一周のろし駅伝」は、市内の12前後の山城が参加するほか、滋賀県から岐阜県、福井県、新潟県、さらには広島県までつながっています。このほか松尾寺山砦のトレッキング（松尾寺山登山道保存会）や、京極氏館（上平寺）での山里料理バイキングなど、各地域が連携しながら活動が展開されています。

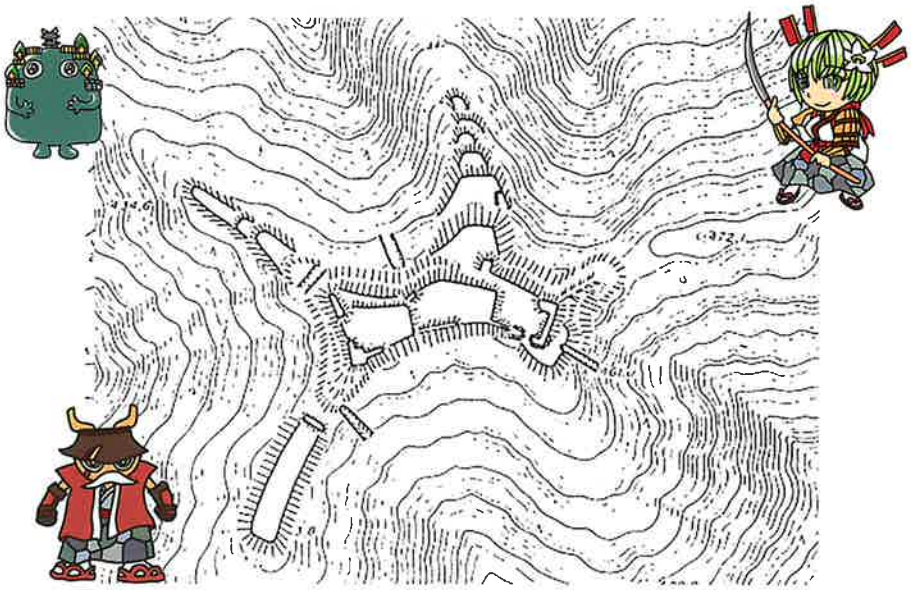
第22回　全国山城サミットinまいばら（2015.10.24～25）の会場に吊るされた「鎌刃城大櫓」。市内の小中学生が描きました。2日間にわたり、全国から700人の山城ファンが集いました。

■八講師城　―中世京極氏最後の砦―（梓河内）

河内には、京極氏の支城があり、「小字猪の鼻に所在し、…京極氏の隠れ城」といわれます。さらに、集落から、林道をさらに山中に入ったところに八講師城があり、江戸時代の地誌には、多賀豊後守高忠や京極九郎高数など、北近江の守護京極氏や有力家臣の伝承があります。城跡の中心部は、方形を意識した三段の曲輪で構成されており、最も上位の西の曲輪が主郭です。東曲輪には、石垣による虎口がのこり、戦国末期に改修されたことがうかがえます。中心部から派生する尾根は５本ありますが、八講師城のすごいところは、この尾根すべてに曲輪を配置していることです。西尾根や南尾根では広く長大な曲輪が続き、かなりの土木量が投入されて、大軍勢が駐屯したようです。八講師城は、坂田郡南部に勢力を維持した、中世京極氏最後の当主京極高広の拠点かもしれません。

主郭の櫓状遺構

北曲輪群の切岸



八講師城概要図

■男鬼入谷城（高取山城）　―霊仙深くの軍事拠点―（彦根市男鬼町・多賀町入谷）

米原市の南に位置する彦根市鳥居本地域（旧坂田郡）は、霊仙山地が深く、多賀町域とまたがって谷筋に小集落がわずかに点在しているにすぎません。男鬼入谷城は、見渡す限り山しか見えない標高685㍍の尾根頂部にあり、主要街道の北国街道や東山道（中山道）からは、東に約５㌔も離れた、まさに山中に孤立した立地です。

城は尾根上のふたつの頂部と尾根筋を利用して築かれています。北側には三重堀切や、これに面して内側に石積を持つ土塁を設け、東側尾根には、食い違いの竪堀を伴った櫓台や二段にわたる畝状竪堀群が構築されています。ほかにも、南に配した巨大な二重堀切や、石塁で築かれたトーチカ（特火点）的遺構とその直下の垂直の切岸とさらに二重堀切。それらの多くは、岩盤を削っていて、石塁とあわせて高い土木能力がうかがえ、戦国時代後半の山城の到達点と評価されています。戦国後半に、霊仙山間部を領域とした権力者は京極高広です。八講師城を中世京極氏最後の本拠とするなら、男鬼入谷城は、他の勢力の軍事力が及ばない山間地に、軍事目的のみで築城された出撃拠点ととらえることができます。

男鬼入谷城概要図（作図：中井　均）

★米原市山城キャラ：「やまじろー」「まい姫」「かまはじい」

◇コラム　京極高広の城

京極高広は、上平寺城を国人一揆で追われた京極高清の長男で、「郷野文書」に、「河内」の「御屋形様」と称されていることから、八講師城がその本拠と考えられます。弟高吉との家督争いを天文11年(1542)に和睦した高広は、台頭する浅井久政を攻めて臣従させ、天文19年から22年まで南近江の六角氏との抗争を続けます。このとき、高広軍の南下はつねに霊仙山中を越えて、芹川に沿って平野部を攻める山越えルートでおこなっています。高広は、坂田郡の山間部、霊仙山麓で勢力を維持していたようで、男鬼入谷城がその軍事拠点です。しかし、永禄３年(1560)、浅井長政が六角氏と断交した際に、六角氏とともに湖北へ侵攻しましたが、失敗し、北近江を追われます。

出典:『歴史群像』No.93

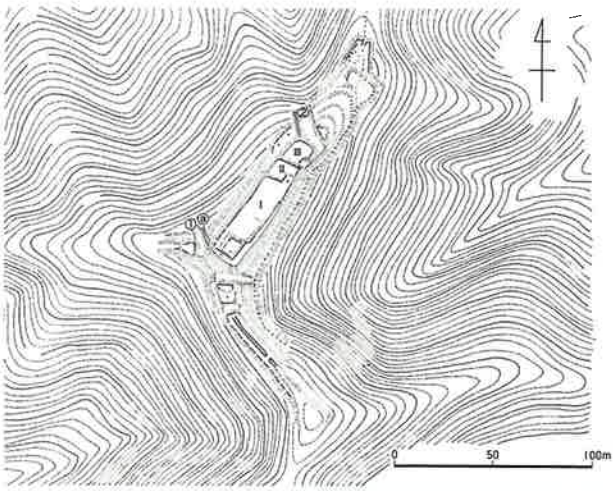
■松尾寺山砦　―尾根道の砦―(上丹生)

西坂から松尾寺参詣道が尾根の稜線にさしかかったすぐ西側の尾根上に位置しています。３本の堀切を設けて尾根筋を遮断する構造で、中央の堀切がもっとも大規模で、上部の幅は約８㍍あります。この堀切の東側の削平地が比較的明瞭なことから、中心的な曲輪と考えられます。堀切側に土塁を設けていることから、西側に対する防御が意識されていることがわかります。ここから両端の堀切までは、自然の尾根筋です。峠道や尾根筋を防御する臨時的な築城と考えられます。

松尾寺山砦跡概要図(作図:中井　均)

■枝折城(土肥城)　―在地土豪の城―(枝折)

枝折城は「土肥の古城」とよばれます。土肥氏は、箕浦庄の地頭として赴任した鎌倉御家人で、番場、多和田、醒井に分家して、「箕浦庄の三土肥」と称しました。枝折城は、醒井殿と称した系統の詰の城と考えられます。尾根筋上に、ほぼ一直線に曲輪を配置し、城よりも高い南方には三本の堀切を構えています。主郭には南と東辺に土塁を巡らせ、南端の土塁は一段高くなって櫓台となります。主郭の北にも巨大な堀切を設けて山麓からの尾根筋を完全に遮断します。きわめてコンパクトな構造で、立地や規模、構造などから、典型的な在地土豪の詰の城です。



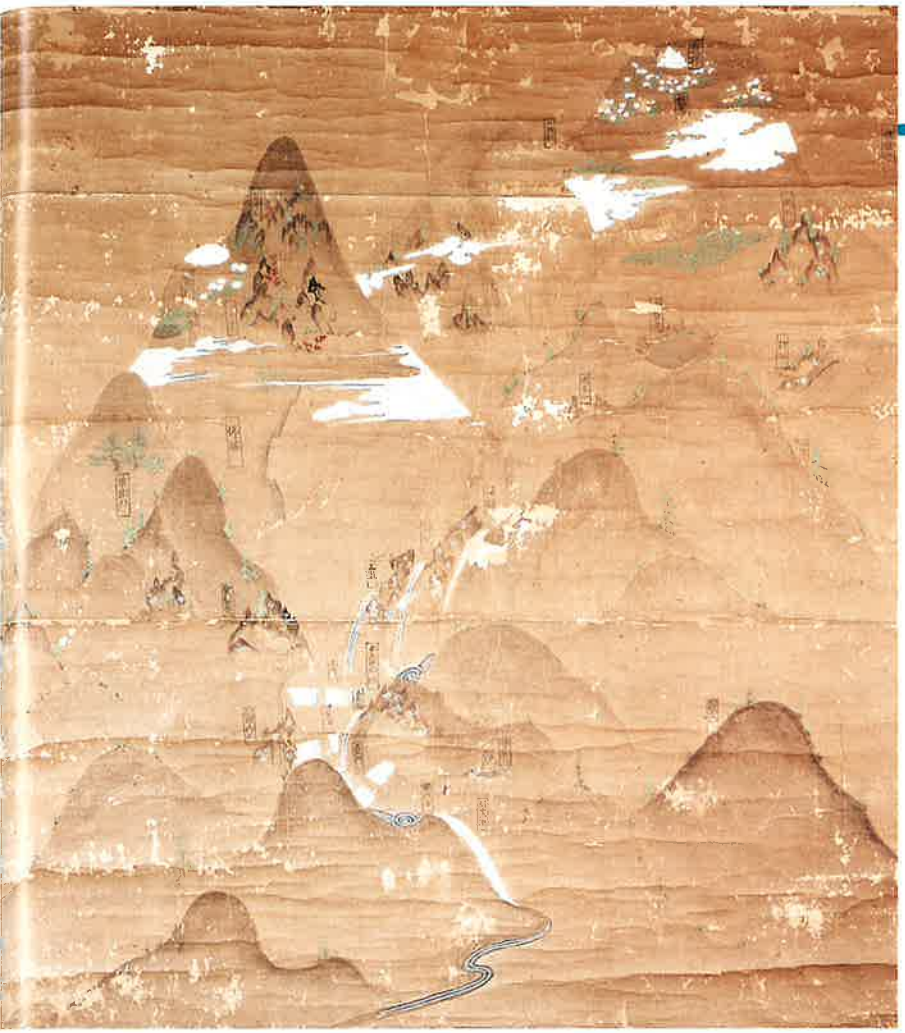
枝折城跡概要図(作図:中井　均)

枝折城跡

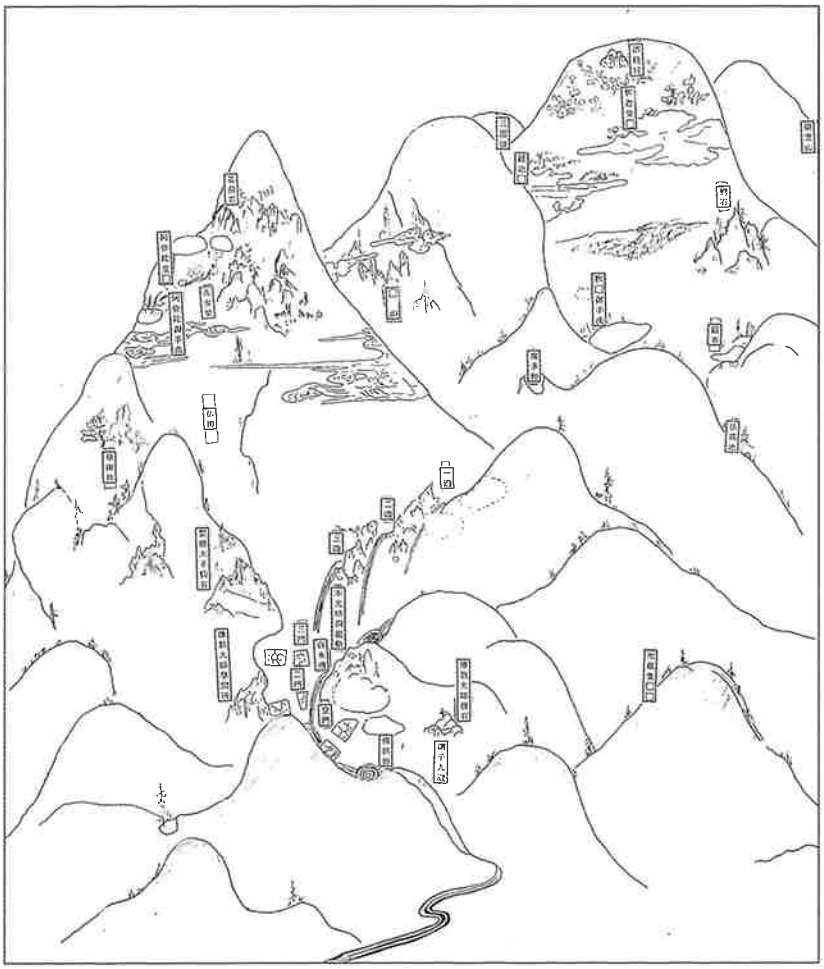
枝折城跡の堀切

松尾寺山砦の堀切

松尾寺山砦主郭



霊山寺之古図（個人蔵）



古図トレース図（作図：藤岡英礼）

Ⅲ. 霊仙山の山岳信仰

i　霊仙山を描いた絵図 —『霊山寺之古図』—

「伊吹、霊山、比良、綿向ハ大山高峯也」（『淡海温故録』1680頃）、「霊山、江陽四高山ノ其ノ一ツナリ」（『淡海木間攫』1792）と記された霊仙山を描いた、縦135㌢×横115㌢の絵図で、桃山時代の作とされます。枝折方面から遥拝した風景で、丹生川沿いが霊仙信仰の中核であったことを物語ります。阿弥陀ヶ岳と、釈迦を本地とする経塚山（中霊仙）が主体で、最奥の「億（奥）霊山」は山形のみで、信仰世界から外れています。「御経坪（経塚山）」「釈迦堂」「釈迦御手洗」「阿弥陀堂」「阿弥陀御手洗」などの記載のみで、建物は描かれていません。山麓部の描写では、一から三瀧、白水瀧を境に趣が異なり、壹門、二門、三門は石垣を伴い、「伝教大師学問所」や「本光坊洞屋敷」などの宗教施設を示唆しますが、本堂などはなく、霊山寺の伽藍の痕跡はありません。山上部は、人里から離れた山中の石窟などに籠もって、坐禅し瞑想する「禅定」の場のようです。また、「伝教大師学問所」や「伝教大師硯石」がみえますが、奈良仏教者や役行者、不動明王などの修験道的な名称も皆無です。江戸時代に隆盛した松尾寺の影響も見られません。いずれにしても、この絵図は、霊仙山そのものを神聖視する曼荼羅世界を描いています。

ii　霊山寺のまぼろし

――かつて、坂田郡丹生郷に山号を中霊山と号す「霊山寺」がありました。その規模は、僧坊18宇、僧侶等計29人。七つの別院をもつ大寺です。霊山寺は、栗太郡の大菩薩寺（金勝寺／栗東市）の25箇別院のひとつでした――

これまで、霊山寺の基礎的な文献とされてきた『興福寺官務牒疏』の内容です。この文献は嘉吉元年（1441）に書かれたとされ、近江、大和、山城、河内、伊賀に至る221ヶ寺の寺名・来歴や規模が記されています。しかし、近年の研究で、南山城の椿井権之輔政隆（1770～1837）の創作で、偽文書と判明しています。興福寺の末寺とされる寺社を詳述し、興福寺の勢力誇示のために作られたと考えられ、近江では金勝寺（栗東市）に肩入れし、霊山寺の由緒に、金勝寺の興隆に関わった興福寺僧の宣教や願安を登場させ、その別院としています。記述内容は下記の通りで、要約すると、役行者が活躍する山林修行の場として修験道の素地が作られ、奈良時代には、白山を開基した泰澄が寺院を開基し、宣教や願安が入山して七精舎や鎮守を整備したということです。泰澄や奈良仏教系の話は、椿井がよく使う題材で、現時点では、文献や絵図、さらに考古学的な発見もなく、霊山寺は幻であったといわざるをえません。

しかし、霊仙山の山岳信仰については、山麓の山寺遺跡や、山中の修験道の行場、伝承や美術工芸品、民俗文化を通じて迫ることができます。

霊山寺。　在坂田郡丹生郷。號中霊山
僧房十八宇。政所一人。公文一人。下司一人。
目代二人。下僧十六人。神主八人。
天武天皇白鳳九年庚午。役氏始來入修法所。元正天
皇養老元丁巳年。越智泰澄大師開基。本尊毘盧遮那如
來也。金蕭菩薩藥師彫刻安置。神護景雲三年。宣教大
師於山下。建立七箇精舎云。弘仁二年願安大師再
興。鎮二所丹生神。在南北山下兩所。
△七箇別院
觀音寺。在犬上郡落合里。　安養寺。在犬上郡河内村。
大杉寺。在大杉。　佛性寺。　莊嚴寺。　男鬼寺。俱坂田郡。
松尾寺。在丹生西ノ山。
以上金勝寺別院也。

◇コラム　『興福寺官務牒疏』掲載の寺院 ――

『興福寺官務牒疏』には、霊山寺のほかに、北近江の山寺（山岳寺院）として、太平護国寺（「在坂田郡伊吹山　僧房百十六宇　光仁帝宝亀九戊午年三銖上人開基（後略）」／米原市太平寺）や、弥高護国寺（「在同郡伊吹山　僧房三百宇　元明帝養老元年越智泰澄大師開基（後略）」／米原市弥高）の伊吹山寺の２カ寺。大吉寺・己高山五箇寺・大箕山寺（いずれも長浜市）など、現在遺構が確認できる山寺が名を連ねます。

伊吹山弥高護国寺跡
（米原市弥高／撮影：高木浩二）

伊吹山太平護国寺跡
（米原市太平寺／昭和38年頃）

◇コラム　椿井政隆の創作活動

山城国相楽郡椿井村（現木津川市）の椿井政隆は、興福寺お抱えの寺侍でした。古文書などの収集家で、依頼者の求めに応じ、精密な実地調査や聴取りをもとに、史料が欠けた部分を創作して、式内社の縁起、新興有力農民の系図、中世の社寺の絵図など、数百点におよぶ創作文書を生み出しました。なかでも『興福寺官務牒疏』は椿井作品中の「最高傑作」といわれます。霊山寺の七ヶ別院も、もともと霊仙山麓にあった山寺群を、興福寺の勢力拡大を描くために、『官務牒疏』に取り入れたのかもしれません。

金勝寺（栗東市）

安養寺

男鬼集落

落合集落

仏生寺集落跡

iii　山麓の山寺遺跡と廃村

『官務牒疏』にその名がみえる霊山寺七ヶ別院とは、観音寺(多賀町霊仙落合)、安養寺(多賀町河内)、大杉寺(不明)、仏性寺(彦根市仏生寺町)、荘厳寺(彦根市荘厳寺町)、男鬼寺(彦根市男鬼町)、松尾寺(米原市上丹生)です。彦根市の3集落は旧坂田郡鳥居本村に属しました。

それぞれの遺構は、松尾寺(Ⅳ章)を除いてほとんど特定されていません。安養寺は現在も寺院がありますが、中世の面影が見当たりません。男鬼寺の所在は不明ですが、山麓から尾根上にかけて比婆神社(戦前の建立)があり、宗教的な雰囲気はあります。観音寺があったとする落合は、霊仙山の登山口に位置し、観音堂の伝承や「堂ノ本」「堂前」などの地名があり、登拝基地的機能が想定できます。仏性寺は、近年山麓の「坂ヤ」に移りましたが、標高300㍍の旧集落跡は、中央の道の両側に石垣を築いた屋敷跡が展開し、山寺の様相がうかがえます。

大杉寺の位置は不明で、霊仙山支峰の武奈山頂に幹回り約6㍍の大杉を神体とする「大杉竜王」と、露頭石をイザナギの拠り所とする「北原竜宮」があり、雨乞信仰の聖地です。さらに、彦根市武奈町(標高500㍍)から番場に向かう開けた斜面に段々畑があり、通称「坊ガタワ」とよばれています。あるいはこのあたりが大杉寺の候補地かも知れません。

荘厳寺については別に述べます。

武奈集落跡

武奈から霊仙山を望む

大杉竜王(武奈町)

◇コラム　榑ヶ畑のくらし

榑ヶ畑は、霊仙山中腹の標高420～500㍍の谷筋と日向の斜面地に発達した集落でした。木地師の祖惟喬親王に従ってきた人たちが村を開いたといい、氏神八坂神社は「ザハ権現」と称し、修験道の本尊蔵王権現とする考えもあります。日中戦争を契機に、配給品受給地の醒井への往復(片道2時間)や、新しく入手した東黒田地域の耕地への往復(片道3時間)の不便さや、戦後の学制改革への対応などから、明治11年(1878)に51戸あった集落は、昭和32年の光顕寺移転で廃村になりました。醒井に鉄道が開通(明治33年)する頃までは、男鬼―仏生寺―鳥居本を経て、ほぼ真西に直線的に彦根に出る最短コースが本道でした。落合、武奈、明幸、男鬼など、やはり廃村となりつつある村々と尾根道や谷筋を通して交流が盛んでした。(モノクロ写真は1968年頃)

榑ヶ畑集落跡

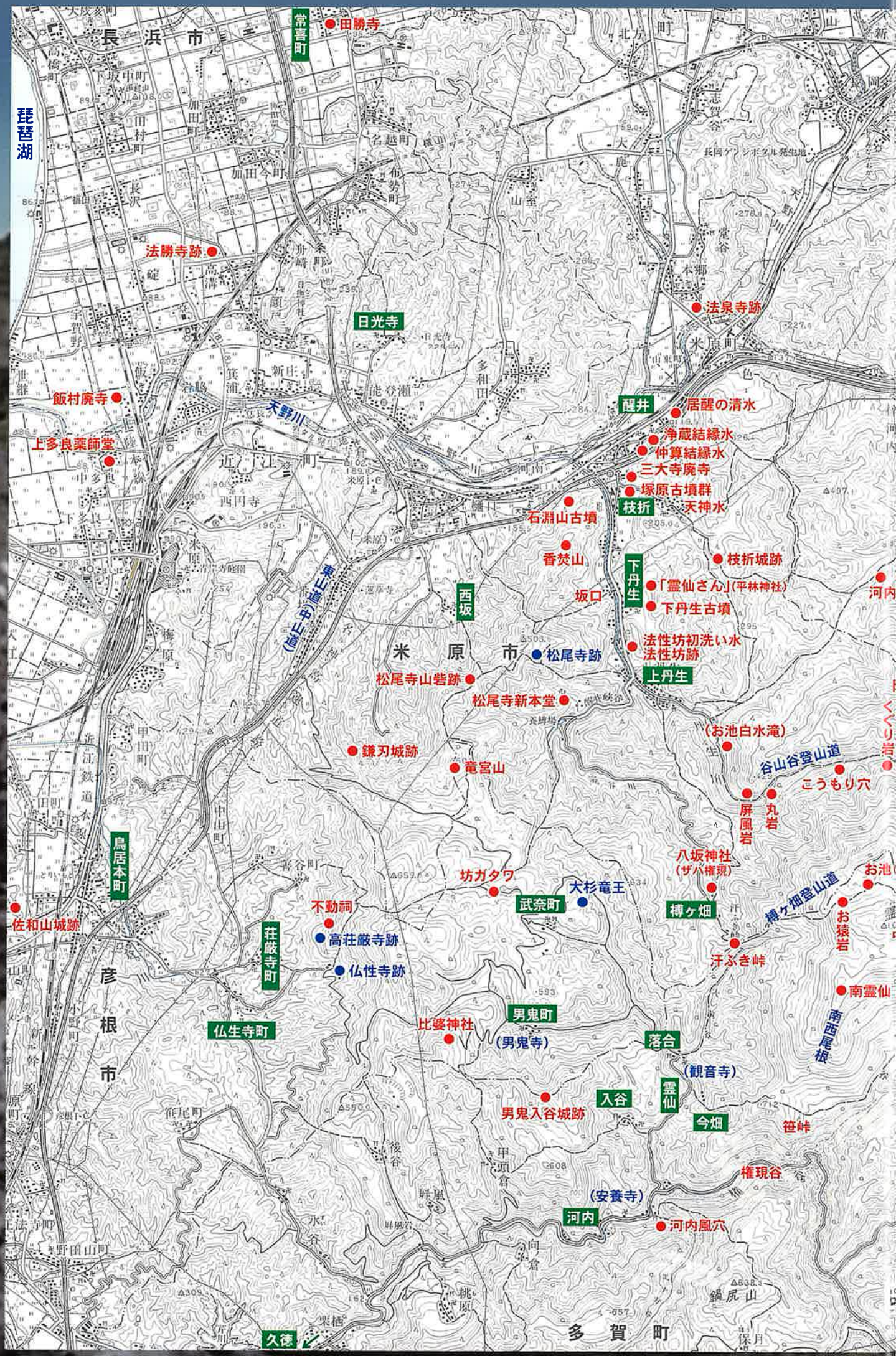
榑ヶ畑八坂神社の春祭

榑ヶ畑の旧景

木出し

榑ヶ畑の民家

炭出し

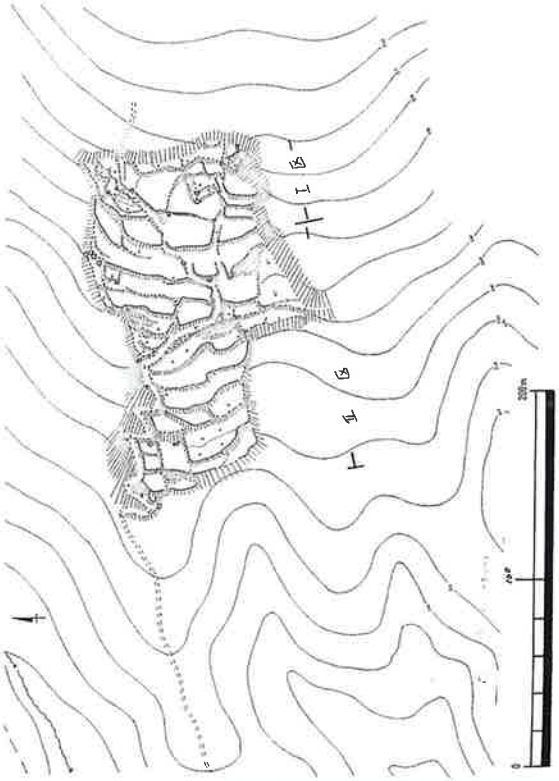

琵琶湖
長浜市
常喜町
田勝寺
法勝寺跡
日光寺
法泉寺跡
飯村廃寺
上多良薬師堂
醒井
居醒の清水
浄蔵結縁水
仲算結縁水
三大寺廃寺
塚原古墳群
枝折
天神水
石淵山古墳
香焚山
枝折城跡
下丹生
「霊仙さん」(平林神社)
坂口
下丹生古墳
西坂
法性坊初洗い水
法性坊跡
米原市
松尾寺跡
上丹生
松尾寺山砦跡
松尾寺新本堂
(お池白水滝)
谷山谷登山道
こうもり穴
屏風岩
丸岩
鎌刃城跡
竜宮山
鳥居本町
八坂神社
(ザバ権現)
坊ガタワ
大杉竜王
武奈町
樽ヶ畑
樽ヶ畑登山道
お猿岩
佐和山城跡
不動祠
高荘厳寺跡
荘厳寺町
仏性寺跡
汗ふき峠
南霊仙
彦根市
男鬼町
比婆神社
(男鬼寺)
仏生寺町
落合
(観音寺)
南西尾根
男鬼入谷城跡
入谷
霊仙
今畑
笹峠
権現谷
(安養寺)
河内
河内風穴
鍋尻山
多賀町
久徳

荘厳寺の不動祠

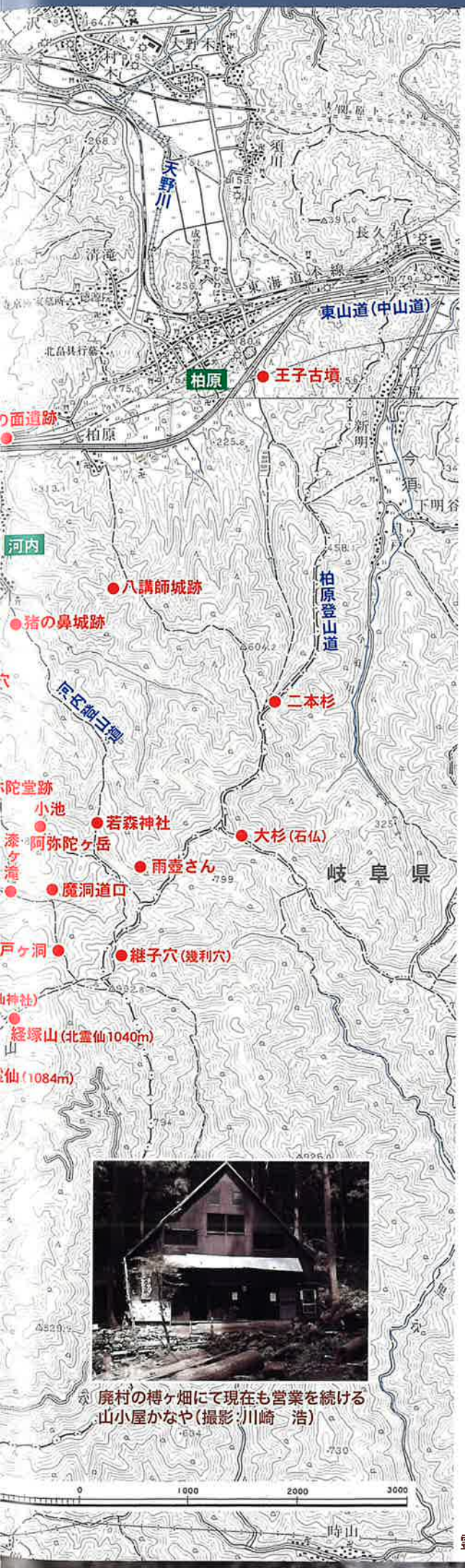
高荘厳寺跡

■荘厳寺跡

荘厳寺集落背後の向山中腹、山道を30分ほど登ったところに雨乞信仰で霊験あらたかな「荘厳寺の不動祠」と不動滝があります。ここに奥ノ院荘厳院があったと不動尊縁起書に記されています。祠への経路上の台地状の地形に、190×110㍍の規模で複数の平坦面を確認しました。小字名は「高荘厳寺」で、これが荘厳寺跡と考えられます。本堂の位置は不明ですが、上部の大規模な平坦面群と下部の長細い平坦面で構成された11程度の坊院跡があります。後述する松尾寺には、独立した行場や参詣ルートがあることから、荘厳寺も不動滝の行場を中心に独自の修行空間を形成していたのかも知れません。



高荘厳寺跡概要図（作図：藤岡英礼）



廃村の樽ヶ畑にて現在も営業を続ける山小屋かなや（撮影：川崎　浩）

霊仙山関連地図

iv　霊仙山の修験道と修行者列伝

霊仙山そのものを神仏が宿る聖なるものと崇拝し、山に入り、森をひたすら歩き、山に籠り、岩場や滝、洞窟で厳しい修行することで、清められ、霊仙山の神仏と交わり、その霊力をいただき、超能力を発揮できる不屈の行者になる。

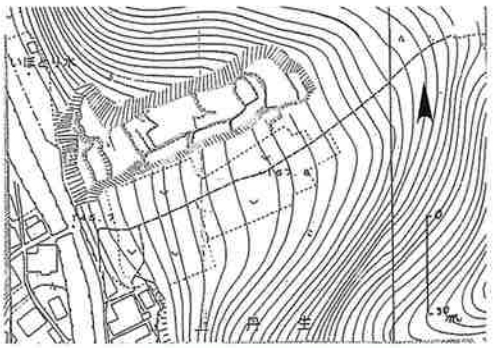
元行者道（多賀町河内下村）

これが修験道で、その実践者を行者（山伏）といい、彼らが拠った施設が山寺（山岳寺院）です。山中の池、滝、崖、窟、泉は行場で、多賀町の権現谷には、河内下村の芹川沿いに「元行者参道」の碑があります。上流山女原で、役行者が大峰山に入る前に、ここの不動明王で修行したという伝承があることから、「元行者」です。現地は、細い谷の両側に険しい岸壁がそびえ、霊気が感じられます。

「口の権現」は大きな杉と鳥居があり、まん中の３㍍あまりの岩が権現のご神体です。さらに３㌔ほど奥の右岸に鳥居があり、大きな岩の裂け目を登ると洞窟があり、なかの石祠に役行者の石像が祀られている「奥の権現」です。戦前、大峰山参りの山伏たちが、御礼参りでホラ貝を吹きながらこの谷を行き来しました。

役行者斧割水（松尾寺七不思議）

法性坊初洗の水
（いぼとり水／七湧水）



法性坊跡概要図（作図：藤岡英礼）

■霊仙山修行者列伝

『官務牒疏』の白鳳９年（670）、役行者の入山。養老元年（717）、泰澄による霊山寺の開基。奈良仏教系の宣教や願安の整備については信憑性に欠けます。

松尾寺は、元慶年間（９世紀後半）に伊吹山寺を建立した三修の高弟松尾童子が、興隆に尽力しています。延長４年（926）に第13代天台座主になった法性坊尊意は、息長丹生真人一族の出身で、いぼとり水（上丹生）を「法性坊初洗の水」といい、丹生谷の出身ともされます。背後の斜面には「法性坊跡」の坊院跡がのこります。平将門の乱や、雷神となった菅原道真の調伏に霊験があったと伝えられています。

中世には、応安２年（1369）の「山伏衆中請文」（『観音寺文書』）に、観音寺山伏がおこなった宗教問答の賛成署名に「松尾寺　行快」とあり、山岳信仰の寺として栄えてきたことがわかります。

◇コラム　霊仙三蔵の顕彰活動

霊仙三蔵は平安時代前期の僧で、唐に渡り、経典の翻訳に従事しました。「三蔵」の称号を賜ったのは世界で８人だけで、日本では霊仙だけです。その出身を醒井付近とする説は、高名な仏教史学者の発言や小説によって広まりましたが、いまのところ文献による明証が得られません。地元では、地域にゆかりのある偉人として霊仙三蔵顕彰の会が組織され（平成12年）、地道な顕彰の歩みが展開されています。

JR醒井駅前には霊仙三蔵像が立ち、上丹生には霊仙三蔵記念堂が建立されています。「屈指の名僧」の顕彰を通じて、全国の霊仙三蔵ゆかりの地で関心が高まり、米原に集うことで、研究が進むことが期待されます。

v　霊仙山由来の仏像

霊仙山には、経塚山（北霊仙）、三角点（中霊仙）、南（奥）霊仙の三つのピークのほかに、阿弥陀ヶ岳があります。阿弥陀、釈迦、薬師の三如来が、阿弥陀ヶ岳、経塚山、中霊仙の本地仏としてお堂に祀られていたといわれています。阿弥陀堂と釈迦堂は古図に記されています。

霊仙山に「仏こかし」の伝説があり、霊山寺が滅びたのち、山上の光が邪魔になって、琵琶湖での漁ができないと、漁師が霊仙山に登ってきました。彼は光り輝く三体の仏像を見つけ、それを谷底へ打ち落として帰りました。釈迦如来は朽ち果て、阿弥陀如来は日光寺または枝折から、長浜市常喜町の田勝寺へ。薬師如来は、上多良へ流れついて薬師堂に祀られました。転落した仏像が天野川に沿って流出したという伝説は、丹生谷と天野川沿いの地域が霊仙山の信仰圏の中核であったことを物語ります。

木造薬師如来坐像
（上多良真広寺／平安時代／重要文化財）

田勝寺

■木造薬師如来坐像（上多良真広寺／平安時代／重要文化財）

像高108.5㌢。見るからに均整のとれた一木割矧造りの漆箔像で、温和な表情からは定朝様式の藤原仏を感じさせますが、どっしりとした体躯からは貞観様式をも感じさせ、平安末期の作と考えられます。現在、上多良の集落内の薬師堂に安置されています。

阿弥陀ヶ岳（枝折から）

阿弥陀ヶ岳参詣（枝折）

◇コラム　枝折の阿弥陀ヶ岳参り

標高847.2㍍の山で、醒井付近からみると御仏飯を盛った形に似ていることから「おぶくさん山」とよばれています。文政４年（1821）の旱魃のとき「旧例にまかせ阿弥陀ガ岳に登山すること既に三、四度」とあり、枝折の雨乞い場でした。昭和53年に行事が再開され、毎年、茗荷石がある阿弥陀堂跡へのお参りがおこなわれています。

阿弥陀堂跡

Ⅳ. 普門山松尾寺の信仰と仏教美術

i　松尾寺の歴史

松尾寺は松尾寺山の山頂(504㍍)より少し下った山腹にあります。本堂を中心に、南側に延びる屋根上や西側の谷に沿って多くの坊院跡があり、石段や石垣が残っています。

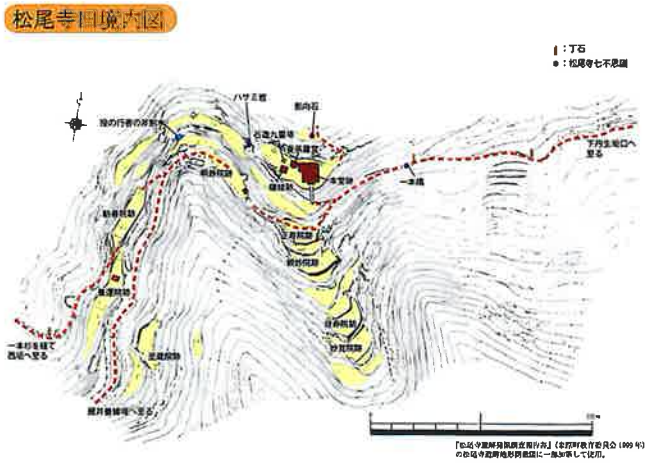
寺伝によると、天武天皇９年(680)に役行者が松尾寺山に入り修行したのがこの寺の始まりとされています。元慶年間(９世紀後半)には、伊吹山寺の創建にかかわった僧三修の弟子松尾童子がこの寺の興隆に力を注いだと伝えられています。応安２年(1369)の記録(『観音護国寺山伏衆中請文』)には、松尾寺の山伏「行快」の名がみえ、近江各地の寺院の山伏とつながりをもっていたことがうかがえます。

発掘調査により９世紀後半頃の土器片が出土しており、また坊院跡からは戦国時代以降の遺構が検出されています。全体に保存状態が良く、古代以来の山寺の実態を知る上で貴重な遺跡で、湖北地方の山岳信仰を考える上で欠くことのできない存在です。平成23年３月に滋賀県の文化財(史跡)に指定されました。

松尾寺旧本堂

詮寿院跡発掘状況

影向石(七不思議)



県史跡松尾寺跡遺構図

■松尾寺七不思議を巡る　―修行者の足跡―

松尾寺の七不思議は飛行観音、影向石、斧割水、鐘鋳場、一本橋、挟み岩、夫婦杉です。七不思議伝承は、古くから山岳信仰の寺として、多くの人に信仰され、親しまれてきたことを物語ります。このうちいくつかは、各地でほぼ同じ内容の「不思議」が伝承されています。"影向"とは神仏が仮の姿をしてこの世に現れることで、降り立つ石を「影向石」といいます。三井寺の「三尾影向石」や石山寺の「比良明神影向石」などがあります。「役行者の斧割水」も、ある僧が岩等を突いたところ、清水が湧き出したという伝承で、「弘法水」などがあります。醒井の浄蔵結縁水も同様です。「挟み岩」は、東近江市太郎坊宮の「夫婦岩」が有名で、悪心のある者が通ると挟み付けられるという言い伝えです。「弘法大師が弁当の箸を突き刺し、それが成長した」という杉の大木も各地にあり、松尾寺では「夫婦杉(二本杉)」とよばれています。

松尾寺登山道と見所

各務原飛行学校から寄進された木製プロペラ
（昭和10年）

本尊飛行観音御前立

ii　本尊と参詣者

松尾寺の本尊は聖観音と十一面観音の二体の観世音菩薩で、秘仏です。高さ二寸八分の二体の尊像が雲形の上に仲良く並んで立っておられるとのことです。役行者が松尾寺山中で修行中、空高くより紫の雲に乗って飛来して、現在の本堂跡の上方約200㍍ばかりのところにある影向石の上に降りてこられました。役行者がその尊像を洞窟に安置し、本尊としてまつったのが当寺のはじまりと伝えられています。空中から雲に乗って飛来して来たため、「雲中飛来尊像」とか「雲中飛行観音」とよばれました。飛行機の普及とともに空の安全を守るお寺として有名になり、昭和10年には、各務原飛行学校からプロペラが奉納され、近年は、航空業界関係者や飛行機で旅行される方々のお参りが多くなっています。

再建された本堂

◇コラム　御開帳

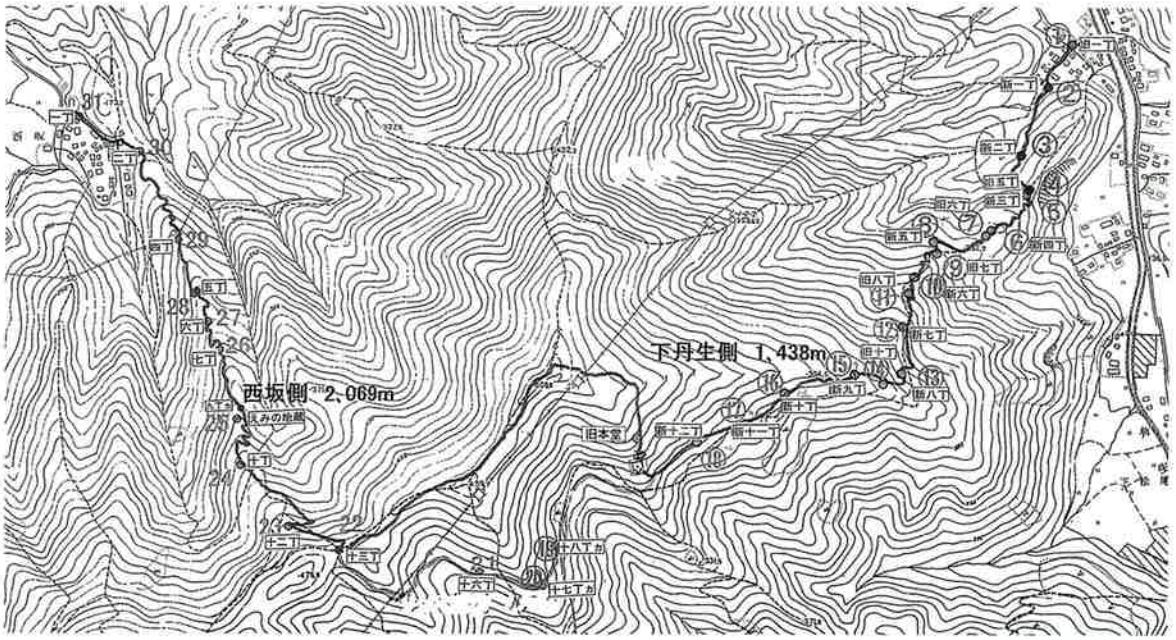
普段非公開の本尊や寺宝を特別に参拝者に拝観させることを御開帳といい、松尾寺でも何度か実施され、そのときの看板が残っています。承応２年（1653）のものが最も古く、その後何回も実施されていますが、延享３年（1746）には美濃の谷汲山華厳寺や彦根後三条の長久寺へ出かけておこなう「出開帳」が実施されています。醒井の中山道の分岐点や枝折、下丹生坂口の道標や、下丹生参詣道の近代の丁石は、御開帳に合わせて寄進されたものでしょう。

中山道の道標

近代に建てられた丁石

寄進者名

御開帳ポスター（昭和10年）



参詣道丁石位置図

■参詣道と丁石

丁石（ちょういし）とは社寺の参詣道の路傍に建てられた道案内の石標で、「一丁」「二丁」等と丁数が刻まれています（一丁は約108㍍）。下丹生の坂口側からの参詣道には２種類の丁石が混在しています。ひとつは近代のもので、全て方柱型で阿弥陀如来を表す梵字（種子）の下に丁数が彫られており、背面に寄進者名が刻まれています。12基全部そろっています。一方、もう一種類、古い型式の室町時代末期の丁石が存在します。現在は「一丁」、「五丁」、「六丁」、「七丁」、「八丁」、「十丁」の６基が残存し、その形態は全て先端が三角形で、その直下に２本横線があり、その下に梵字一字が描かれ、それに続いて丁数が彫られています。これを板碑型丁石といいます。その梵字は阿弥陀如来、薬師如来、十一面観音などをあらわしています。西坂側の丁石は、地元で「丁仏」とよばれ、13基残っていますが、５基の行方がわかりません。なかには石灰岩の自然石に刻まれた磨崖型のものもあります。梵字（種子）のほとんどが阿弥陀如来か十一面観音です。これらも室町時代末頃のものです。花崗岩製の十六～十八丁の３基のみ江戸時代初期の建立と推定されます。西坂の柴田家の絵図には、参詣道と丁石が描かれています。

初一丁（西坂）

二丁（西坂）

四丁（西坂）

七丁（西坂）

十丁（西坂）

旧一丁（坂口）

旧六丁（坂口）

旧八丁（坂口）

◇コラム　丁石をめぐる信仰

丁石を奉納することで参詣者の便宜を図り、功徳（くどく）を積むことになります。室町末期のものには２基に「佐和山」の文字が刻まれていて、彦根の人物の関与がわかります。両参詣道にあることから、このころ参詣道が整備され、一般の人の参拝が盛んになったようです。江戸初期のものは西坂側にあり、奉納者は近隣の樋口と番場の人です。昭和初期のものは、醒井や上下丹生の人が中心で、昭和10年の秘仏御開帳に合わせて整備されたと考えられ、醒井駅が参詣の窓口だったことがわかります。

iii　松尾寺の文化財

■鰐口（重要文化財　鎌倉時代）

軒下に架けて参詣人が鳴らすもので、面径33.5㌢あります。弘安６年(1283)の鋳造で、もとは尾張国海西郡三腰(愛知県愛西市見越町)の極楽寺にあったものです。尾張鋳物師の作品として注目されます。

■絹本著色観経変相図（県指定文化財　南北朝時代）

縦302.5㌢×横234.7㌢で、阿弥陀如来を中心とする極楽浄土の世界を描いたものです。観経変相図としては滋賀県内最大の大きさを誇ります。

■石造九重塔（重要文化財　鎌倉時代）

本堂跡の右手奥にあり、花崗岩製で高さ約5.1㍍を測ります。文永７年(1270)の銘があります。基礎には格狭間の両側に宝瓶に挿した２～３本の蓮が描かれ、この種の図案では最古のものだといわれています。

■梵鐘(未指定)

貞享元年(1684)、平安時代から鋳物の生産地として知られる京都三条釜座の藤原国次によって製作されたものです。

■木造聖観音菩薩立像（市指定文化財　平安時代）

像高46.0㌢、桧の一木造りで、衣文は裳の折り返しが大きく、正面に渦文くずれを刻む11世紀の作風を示しています。

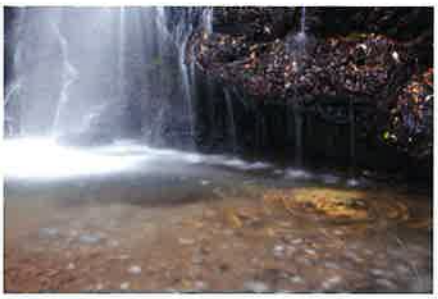
◇コラム　戦国武将と松尾寺

松尾寺には戦国武将の書状が10通ほど所蔵されていて、当時の松尾寺の状況の一端がわかります。浅井氏初代亮政や鎌刃城に本拠をおいていた堀秀治(秀村の父)から手厚い保護を受けていたことや(「天文五年(1536)八月五日浅井亮政書状」、「九月十四日(年不詳)堀秀治書状」)、石田三成の父親で佐和山城にいた石田正継が、松尾寺から60巻の書物を借り、三成に見せようとしたものの機会がないので返却しています(「七月十二日(年不詳)、石田正継書状」)。これらのことから、中世の松尾寺が有力な寺院であり、この地域の学問の拠点でもあったことがうかがえます。このため『官務牒疏』の七ヶ別院のひとつとして創作されたのでしょう。

石田正継書状

霊仙山系

霊仙神社とお池



漆が滝の淵（撮影：中村幸雄）

■「お池」と「霊仙さん」（下丹生）

丹生川流域の下丹生では、霊仙山の登山道八合目付近の路傍にある「お池」を、雨乞い龍神信仰の御神体として、池の側に鳥居を立てて大切に祀っています。「お池」は、「お虎が池」「尼が池」「本池」「仁平池」「蛇池」などと同様に、ドリーネ（窪地）に水が溜まった池のひとつで、氏神平林神社の境内社「霊仙さん」の奥宮です。「霊仙さん」は、明治17年に大火があり、水不足のために多数の民家が焼失したことから、氏神境内に「お池」の龍神を勧請して約２㍍の巨石が立てられた里宮です。境内では、毎年、霊仙祭として湯の花や万燈の神事がおこなわれます。また先立って、霊仙神社参拝登山がおこなわれています。

V．霊仙山と生きる

i　霊仙山をとりまく雨乞い行事

「鈴鹿を歩いていると「雨乞」に関する信仰が異常に多いのに驚かされる。…雨乞に関しては日本一の質量を誇っているのではないかと思われるほどである」（西尾寿一『鈴鹿山地の雨乞』）。

霊仙山を北端とする鈴鹿山地は、東に濃尾平野、西に湖東の穀倉地帯を控えて、農地に囲まれた堡塁のような山地で、流れ出す河川はすべて農耕に利用され、当時の最高技術を駆使して、水利配分や溜池が作られてきました。しかし、水田開発に水の供給が追いつかず、水不足のため農民たちの雨乞い信仰が生まれ、盛んになりました。霊仙山は山麓各集落の雨乞い信仰の山です。雨乞いの対象はさまざまで、山に登る。火を焚く。鉦・太鼓を打ち鳴らす。龍神の住む池。枝折の茗荷岩のような大岩。岩の窪みの水溜り（雨壺）。滝や淵。釣鐘や能面。特定の社寺や氏神等々。山麓の村々の雨乞い行事や伝説を探ることで、「水の神」霊仙山の信仰の本質が見えてきます。

『番場ふるさとの昔ばなし』より

霊仙さん（平林神社）

万燈祭（平林神社／撮影：山田幸祐）

■米原市下丹生の雨乞い

大正２年の記録には、霊仙山のお池について次のような記述があります。「此の池の周囲10間余にして四時ともに清水あり大旱魃に際する時雨乞いとて両丹生より三七日村民登山し雨を祈る、未だ雨降らざる時は村民全部にて旗２流、桶太鼓１個、締太鼓３個を持参してこの池の周囲にて雨乞い踊りを行う。」

雨壺（米原市河内）

■米原市河内の雨壺さん

「御礼おどり河内の花」（明治42年）によると、旱魃のとき、河内の僧が、南の高山の霊泉に住む龍が黄金の蓋に閉ざされて天に昇れないという夢を見ました。水源の湧水を訪ねると、はたして蓋があり、取ると金色の小蛇が出て、たちまち一天かき曇り、雨を得たと記されています。

ザハ権現（八坂神社／榑ヶ畑）

■米原市榑ヶ畑とお虎ヶ池

大正時代には、大太鼓４人、小太鼓４人、鉦１人、音頭取り１人で、「お虎ヶ池」で雨乞い踊りをしたといいます。唄の一節に"ながの日照りで　ものぐさがよ　とらごえさまえ　雨乞いよ"とあり、「お虎ヶ池」の主を「虎御前様」とよんでいます。

■米原市番場の竜宮山

番場では三日三晩祈願して雨がないときに、竜宮山の頂上で付近の木を伐採して大火を焚きました。その火は長浜でもみることができ「番場の雨乞い祈願でいまに雨が降る」と期待されたそうです。

竜宮山からののろし（撮影：高木浩二）

久徳城跡（市杵島姫神社／多賀町久徳）

落合神社（多賀町霊仙落合）

今畑集落の倉庫群（多賀町霊仙）

■多賀町久徳の霊仙参り

芹川流域の久徳には霊仙参りの行事があります。「尼ヶ池」と「本池」に竹筒に入れた御神酒を持って参り、池に注ぎ、池の水を持ち帰り、氏神市杵島姫神社で湯立神事をおこないます。本池には龍神が棲むといい、その位置は他所の人には秘密です。

■竜女伝説

久徳城主の奥方が竜女で、大蛇姿の出産を見られて、霊仙山頂の池に戻る伝説があり、それが、庄屋の妻であったり、置き土産として櫛と笄を置いていくなどのバリエーションがあります。岐阜県側山麓の上石津町（現大垣市）にも同じような伝承があります。

■多賀町霊仙の竜女信仰

西麓芹川上流の落合、今畑、入谷の３集落はともに「霊山さん（天女竜王）」を祀ります。毎年夏に「土用見舞」として霊山山頂の「竜神池」へ参詣していたといいます。

ii　霊仙山と人々のくらし

■林業

―猪の鼻の紅葉も木馬の音にゆる―

河内から見上げる霊仙山は、四合目の高さまで、杉や桧の大木が美林をなしています。かつて、四季を通じて木を曳き下す木馬の音が響いた河内は、昭和40年頃まで林業で賑わいました。大正７年に河内製材所が設立され、深山の良材を集荷するためには林道開設が必要と、大正11年から10年計画で、総延長約12.3㌔の林道工事がおこなわれました。谷が多く、曲折を縫い、水が噴き出し、岩盤に遮られる難工事だったそうです。河内を訪ねると、雄河内谷、雌河内谷、猪の鼻線、稗谷線など霊仙山深く縦横に林道が開通していることに驚きます。

河内集落古写真（昭和30年後半）

霊仙山に抱かれた上丹生集落（撮影：高木浩二）

■木彫

江戸時代の寛政年間(1789～1801)、上丹生の上田勇助と川口七右衛門の二人は、京都で彫刻を学び、帰郷して成光寺本堂の欄間の雲龍、神明神社本殿などの彫刻を完成させ、周囲の目を見張らせました。やがて仏壇彫刻にも取り組み、多くの弟子を養成して、上丹生木彫の祖とされます。仏壇作りでは、七職（木地師・木彫師・漆塗師・金箔押師・錺金職・屋根師・蒔絵師）とよばれる各職人が上丹生にそろった明治末期には、一貫した仏壇生産がおこなわれるようになり、仕事場が家ごとに並ぶ現在の集落景観が見られるようになりました。山間地で、水田や畑がきわめて狭い上丹生ですが、背後に控える霊仙山の豊かで良質な木材資源が活かされています。

木彫の作品（醒井木彫美術館）

神明神社

木彫の作品

野菜の作り物

オコナイの男根形（平成27年）

◇コラム　「山の神」へのお供え物　―河内のオコナイ―

オコナイは村内の豊作・安全などを祈願して、１月から３月にかけておこなわれる神事です。滋賀県の湖北・甲賀両地域では多くの集落でおこなわれています。湖北では、巨大な鏡餅やマユダマ(繭玉)などの奉納が特徴です。米原市河内のオコナイでは、野菜で鶴亀や男根形と女陰形を作ります。これは、男女和合による豊穣と子孫繁栄を祈願する農耕神への供え物です。一方で、巨大な木製の男根形が登場します。河内は林業で栄えました。「山の神」は、一般に女の神とされ、男根形を山の神に供えることで、山は水や食べ物、いろいろな材料を生んでくれます。かつては、山の女神が喜ぶように、より立派に、よりリアルに作られてきました。大切な神事です。

霊仙山と宿場町

VI. 霊仙山を取りまく宿場町

中山道は、美濃との国境から霊仙山の山裾に沿って南西に折れながら京都に向かいます。かつては、醒井から西に向かって、湖東の要港朝妻湊(あさづまみなと)につながり、番場からは小谷道(おだにみち)(北国道(ほっこくどう))が北陸に向かう、古代以来の東西文化の十字路です。山麓の宿場町を紹介します。

■柏原宿

戦国武将がしばしば宿泊休憩に利用した地で、将軍の宿泊所お茶屋御殿(ちゃやごてん)も設置されました。町並みは中山道では近江一といわれるほど長く、神社７社と、かつては30の寺院がありました。広重(ひろしげ)の絵に描かれている、伊吹もぐさを商う「亀屋左京」が宿場の面影をつたえます。

柏原宿遠景(愛宕山から)

■醒井宿

霊仙山からの水が豊富に湧き出て、宿場内を地蔵川の清流が貫通します。石灰岩質の山のために、硬度が高い良質な水とされ、「三水四石(さんすいしせき)」の名所で知られています。霊仙信仰に関連する伝承も多く、水を媒介として、霊仙信仰の中核を担ったと地域と考えられます。

醒井宿問屋場

■番場宿

古代東山道(とうさんどう)が東側山裾を通り、『太平記』の舞台となった鎌倉時代からの交通の要地です。慶長年間(17世紀初頭)に米原(まいばら)湊(みなと)と中山道を結ぶ深坂道(ふかさかみち)が開かれたことで、その合流点である北東(東番場)に宿場の機能が移されました。

番場宿遠景(撮影:高木浩二)

■鳥居本宿(彦根市)

番場との間にある摺針峠(すりばりとうげ)は、琵琶湖が望め、多くの道中記が讃えた絶景の地として知られていました。宿場町は、ベンガラ格子構(ごうしがま)えの家並みがのこり、名産雨合羽(あまがっぱ)の看板や赤玉神教丸(あかだましんきょうがん)の大きな建物が、旧街道の雰囲気をいまに伝えます。

鳥居本宿

【協力者・協力機関（敬称略）】
泉　峰一・江竜喜之・川崎　浩・高木浩二・髙橋健太郎・中井　均・中村幸雄・藤岡英礼
森　望・山田幸祐・松尾寺山登山道保存会

【主な参考文献】
滋賀県民俗学会『湖東・湖西の山村生活』1968
西尾寿一『鈴鹿の山と谷Ⅰ』1987
同『鈴鹿山地の雨乞』1988
中島伸男『鈴鹿霊仙山の伝説と歴史』1989
さんどう会『霊仙三蔵と幻の霊山寺』2001
市立長浜城歴史博物館『近江湖北の山岳信仰』2005
松尾寺山登山道保存会『松尾寺の歴史と文化遺産』2012　ほか

霊仙山　―「江陽四高山ノ其ノ一ツナリ」―　2017.3

米原市教育委員会　〒521-0242　滋賀県米原市長岡1206　TEL.0749-55-4552　FAX.0749-55-4040